



さい帯血バンクNOW

第50号

2009年11月15日発行

日本さい帯血バンクネットワーク

発行者：中林正雄（会長）

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社東館6階

TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417

<http://www.j-cord.gr.jp/>

歴代会長座談会「さい帯血バンクの道程」

設立10周年と広報誌50号を記念して

■発足当初と広報部会

司会◎本誌は今回が50号となります。また設立10周年でもあり、歴代の会長にお集まりいただきました。創刊号発行当時の初代会長の思い出はありますか。

齋藤◎その頃の日本のさい帯血移植は国際的に遅れていたんですが、今では世界で一番さかんに行われている。移植医療の常として、提供者、産科の医

師、ボランティア、日本赤十字社、もちろん医療関係者、そういう人たちのチームワークで急速に発展したと思う。これも公的さい帯血バンクを求める全国の人たちの熱意の結晶みたいなものなんです。

司会◎広報誌を作る広報部会ができたときの委員長が2代目会長の鎌田先生ですが。

鎌田◎ネットワークが始まる時に骨髄バンクとの対比で組織運営の原理原則として、小委員会を作らずにやろうと出発したのですが、実際に始めるとルーチンが多い、そういう中で広報部会ができたわけです。その後、技術指針の改定に関する技術部会などもできました。

齋藤◎骨髄バンクは一元化されていますが、さい帯血バンクは8つの組織の共同体として発足したわけで、どうしても広報誌のようなものがないとお互いの情報発信や連携ができていず「さい帯血バンクNOW」は大きい役割を果たしました。いろんな分野の人が協力したからこの事業ができたという象徴的なものでしょう。

司会◎齋藤先生は会長を退かれても、さい帯血バンクNOWは読まれていますか。

齋藤◎読んでいて面白いし、読みやすい広報誌です。

中林◎齋藤先生が会長のとき感じたのは、いろんな人がいてバックグラウンドが違うのでひとつのことがまとまるのに大変長い時間がかかった。

司会◎その時に事業運営委員長だったのが鎌田先生です。

齋藤◎鎌田先生は非常にご苦労されて、本当に粘り強く議論を継続して、最終的にコンセンサスが得られましたからね。

鎌田◎本当に本当にどうなることかと思いました。

出席者

齋藤英彦 初代会長（1999年8月～2004年3月）

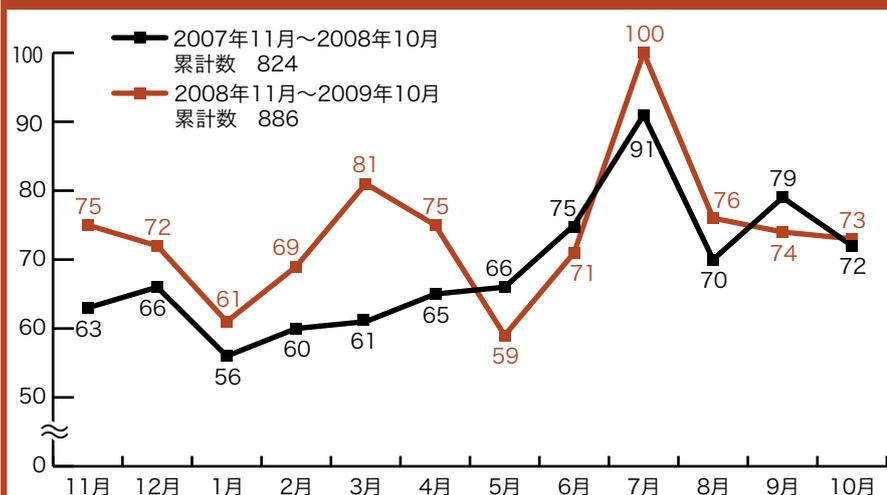
鎌田 薫 第2代会長（2004年4月～2008年3月）

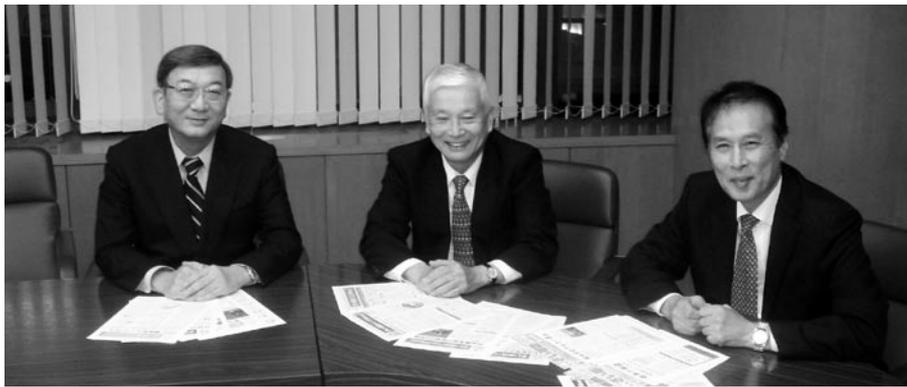
中林正雄 第3代会長（2008年4月～現在）

司会・野村正満（日本さい帯血バンクネットワーク監事）

非血縁間さい帯血移植状況(2009年10月31日現在の速報値)

移植数(累計) **5856** 公開数 **32370**





左から中林、齋藤、鎌田の歴代会長

中林◎法律家というのはひとつひとつの基礎をまとめていくのだと感心した

ことがあります。一番初期のころの思い出ですね。

■合意形成の克服とマラソンの思い出

中林◎ひとつを決めるのに疑心暗鬼があって進まず、やっているうちにこの人はこんな人で、こんな言い方をするんだ、ある程度信頼感ができてきてからスピーディになりました。

司会◎そのうちひとつの所帯としてまとまってきた雰囲気を感じたのは会議中にマラソンを見に行っていたことがありましたね。

齋藤◎ありましたね。東京女子マラソン。高橋尚子選手が負けたとき。

中林◎会議室（日赤）の前を走るから応援しよう。

司会◎会議を休憩して日比谷通りにみ

んなで行って。初期のころには考えられなかった。

中林◎一緒にマラソンを応援したのは4年位たってじゃないですかね。そのころようやく雰囲気が丸くなった。

鎌田◎始まってからも大変だったんだから、スタートする前の「臍帯血移植検討会」は大変だったですね。

齋藤◎大変でしたね。空中分解するかと思いましたね。

鎌田◎将来展望がばらばらだったし、技術的な面でもいろんな違いがあって、なんとか最低のレベルを一致して行うとしていました。

■日赤の協力とこれからのさい帯血バンク

齋藤◎これだけ成長した理由として忘れてはならないのは日赤の協力ですね。事務局を日赤において初代の草刈技監、鈴木事務局員に非常によくやっていたことと、半分くらいが日赤を基盤としたバンクで、技術的なことの安定感、信頼感があってここまで来れた。日本赤十字社の協力がなければとても今の姿はなかった。

司会◎共同検索システムのサーバーを日赤に置くことでもめた記憶があります。

鎌田◎背景には、日赤イコール骨髓バンクの体制の中に取り込まれるのではという警戒心があったと思います。まったく別だということを粘り強く説明して、かなり時間がかかりましたが

ご理解いただけんだと思います。

中林◎ボランティアの中立的な意見がそういう方向に持って行った感じがありましたね。意見がまとまりやすくなった。

鎌田◎さい帯血バンクNOWには各バンク持ちまわりの記事があって、現場とネットワークをつなぐ媒体となり、読むだけでなく作ることは非常に意味があったという印象があります。

中林◎途中途中でさい帯血移植が1000例突破、2000例突破、5000例突破、登録数2万個などその時々に出してきましたよね。それはやはりこれだけ実績が上がっているという意識にはつながった。

鎌田◎移植成績などのデータをどう

やって出していくか、初期の段階でバンクが出すのはけしからんという意見もあった。ネットワークが学会と並んで重要な役割をはたし、情報源になっているのは大きな発展だと思います。中林◎10年でいろんな人が集まってきたおかげで急速に伸びた。伸びていったら、新たな問題が出てきた。今までは零細企業で実験的医療だったものが、スタンダードな医療ではないかと思うようになってきた途端に責任が重くなってきた。でも相変わらず零細企業であって、質も経営状況も社会的評価に堪えるものでないと、逆にバンクが訴えられたりすると、患者さんに迷惑がかかるようになる。それをどうやってきちんとしたシステムに持っていかか今の一番大きな問題かなと思います。

齋藤◎なんといっても財政基盤の確立ですよ。赤字を背負って10年間良く走ってこれたと思います。このままではできないわけで。もっと保険適用の拡大とかキャンペーンを張っていくといいかも知れない。

司会◎将来構想検討会議からできてきたものをアピールしてキャンペーンとして書くのでしょうか。

中林◎それを進めるためには、患者団体が声を大にしていかないといけない。打開していくためには経済基盤をしっかりしなければいけない。補助金行政から離れて診療報酬へ転換していかなくてはならない。

司会◎最初に始まった時には研究室に毛が生えたようなところから。ビジネスとして考えていかないと様々なトラブルがいろんなところから出てくる。

齋藤◎無料で提供することはできなくなるかも知れない。患者負担が発生しないようにするのは難しいかも知れない。

司会◎広報誌にアドバイスをください。こういうのは1回でも途切れないで出すのは大変です。

中林◎継続は力なり、いかに続けるかですね。

鎌田◎配布先をどう広げていくかですね。



連載

私とさい帯血移植「医師として患者として」

第10回◎「再発」に脅えながら

田結庄 彩知

「元気になって家に帰る」それだけが半年にもおよぶ長い入院生活の目標だった。ただそれは「病気になる前の自分に帰って家に帰る」ことではないのだと今では思う。移植で病は治っても、すぐには何もかもが元通りになるわけではない。治療で弱った体で、感染症やGVHD（移植片対宿主病）など移植後の合併症と、再発の可能性という目には見えない恐怖を抱えて、家で暮らしていくのだ。闘いの場が病院から自宅へと移ったことは、嬉しくて嬉しくてたまらなかったが、その一方で、自宅療養となった自分が、どうやって生活すればいいのかよく分からなくて、大きな不安もあった。

移植後ちょうど60日で、私は婚約者が待つ家へと帰り、初めての二人暮らしが始まった。入院生活で体力は落ちていて、台所で夕食の支度をするのに、きゅうり一本を切っている間でさえ、立ってはいられなかった。洗濯物を干すためにベランダに出て、ハンガーを握るだけで頭がクラクラしてその場に座りこんだ。歩いて5分ほどの距離にあるスーパーで買い物をして、家に帰ろうとしても疲れて一歩も動けなくなり、タクシーを呼んでもらったこともある。病気になる前の自分と比べると、上手くできないことがたくさんありすぎて、毎日が戸惑いと試行錯誤の連続だった。食欲もまだあまりなくて、頑張っても箸を置いた瞬間に全て吐いてしまうこともあり、こんなことでは暮らしていけないと、落ち込むこともあった。それでも、ソファに横になっていると、窓からは青い空が見え、遠くから赤ちゃんの泣き声が聞こえる。私が今こうして家にいることができるのも、どこかにいるお母さんと赤ちゃんから新しい命を頂いたからなのだ。生きていることは、多くの方々に生かしてもらっていること。なんて

幸せなんだろうといつもいつも思った。週末には大きなショッピングセンターに行き、彼に車椅子を押してもらって売り場を見て回った後、よくたこ焼きを買って二人で食べた。病気になる前は当たり前だと思っていた小さな出来事の何もかもが、涙がこぼれるほど嬉しかった。そんなある日、一週間に一回通う病院の外來で、同じ時期に移植を受け、無菌室で仲良くなった方が病気の再発で、また入院したという話を聞いた。その瞬間、頭を一発ぶん殴られたような、心を握りつぶされるような、驚きと、恐ろしさで背筋が凍った。移植を受けても再発する可能性があることは、よく分かっていたつもりだったが、実際にそんな話を聞くと、不安で胸がいっぱいになる。あの無菌室での日々を思い出すだけで、吐き気がした。しかし再発を心配して思い悩んだとしても、結果は変わらないのだ。再発に脅える気持ちは心のどこかにあるが、今私にできることは、頂いた新しい命を守るために、毎日栄養のある食事をとり、早く体力を取り戻すことだと思った。

退院して一カ月が過ぎた頃、ようやく新しい生活にも慣れ、車椅子を使わなくてもいいぐらい体力がついてきて、これからの人生を考える余裕ができた。いつかはまた、病院で医者として働きたい、しかし、感染症や再発の可能性などを思うと、現実的にはずっと先のことだと思った。勤めていた病院には退職願いを出して、とりあえず、大学院の入学試験を受けることに決めた。当時のさい帯血移植の生存率を思

うと、この先どうなるのか分からないが、大学院が修了する4年後にまだ元気で生きていたら、その時に次のことを考えようと思った。試験の日、丸刈りに近い頭でガリガリに痩せていた私はまわりから浮いていて、少し恥ずかしかった。数日後、合格通知が届いて挨拶に行くと、研究室の教授は事情をよく分かってくれて、講座の仲間も温かい言葉と優しい笑顔で迎えてくれた。新しい机に本を並べると、ようやく自分の居場所が見付かったような気がした。しかしその一方で、「こんなはずじゃなかった」という気持ちが心の底にはあったと思う。病気になる前は、一生患者さんに携わる医師として働きたいと考えていたから、研究や勉強が主となる大学院生としての立場や、周りの環境の変化になかなか馴染めなかった。しかし、手に入らないことを求めて、嘆き悲しむよりも、今の自分にできることを探していこうと思った。まずは体を治すことに専念し、焦らずに時間が経つのを待って、またチャンスをつかめばいいのだ。病気になる前の自分と今の立場を比べることはやめて、自分なりの新しい一歩を、ゆっくり踏み出そうと心に誓った。

大学院に入学して今年で5年目になる。不運にも再発を経験したが、2度目のさい帯血移植でまた命を繋いでもらい、現在は元気に研究室へと通っている。「こんなはずじゃなかった」とはもう思わない。仲間に支えられ、たくさんの方から教えを受けた今では「これで良かった」と思っている。

筆者プロフィール

たいのしょうさち◎1977年神戸市生まれ。2002年、香川大学医学部卒業後、国家公務員共済組合虎の門病院内科にて研修。2004年、重症再生不良性貧血と診断。ATG療法施行も効果なく8月にさい帯血ミニ移植を受ける。2005年、虎の門病院を退職し東京医科大学大学院に進学。2007年6月、晩期生着不全で再入院。7月、2度目のさい帯血ミニ移植を受け、8月に退院し今に至る。



50号までの誌面でふり返る さい帯血バンクの歩み

日本さい帯血バンクネットワークの事業運営委員会内で最初の小委員会として広報部会が設置されたのは2001年4月でした。その広報部会により本誌「さい帯血バンクNOW」の発行が始まりました。プロの編集者の手を煩わすことなく、広報部員たちの手作りによる誌面作りですが、以来一度も休むことなく発行を続けてきました。本号で第50号という記念の時を迎え、誌面からさい帯血バンクの歩みをふり返ってみたいと思います。

創刊号(2001年9月) ～10号(2003年3月)

創刊号の第1面には「年間200例を超える勢い」という見出しで、急速に移植数が進展している状況が紹介されています。とはいえ、さい帯血バンクの体制はまだ整っておらず、第3号には「ただ今、検討中」として、事業運営委員会が審議されているテーマを紹介しています。中長期展望、技術指針の改定、損害保険の加入、適応判定委員会の設置、外部評価の実施など山積する課題で、まさにさい帯血バンクの具体的な事業内容の構築期であったことを示しています。また、7号では設立3周年記念大会が紹介され、この経験をもとに以後は毎年「年次報告会」が開催されることとなります。さらに、10号では有核細胞数の保存最低基準が

6×10⁸個へと倍増されることが報じられ、その後の細胞数確保という努力の始まりを伝えています。

11号(2003年5月) ～20号(2004年11月)

2003年6月12日に非血縁さい帯血移植が1000例を突破し、そのわずか1年半後の2004年の11月4日には移植数は2000例を突破しました。また、日本さい帯血バンクネットワークは、2004年に設立5周年を迎え、東京ビッグサイトにて5周年記念大会を開催しました。この間、移植数が急激に伸びただけでなく、成人の移植も増加しました。さい帯血移植が骨髄移植と並び造血幹細胞移植の一翼を担うまでに大きく飛躍した時期といえるでしょう。

設立5周年を機会にやなせたかし氏

作のシンボルキャラクターが誕生し、公募で「きずなちゃん」と命名されましたが、「さい帯血バンクNOW」にも第18号できずなちゃんが登場して、誌面デザインを一新しました。きずなちゃんは、現在に至るまでさい帯血バンクのあらゆる媒体で活躍しています。また、17号からはさい帯血の「採取病院訪問記」の連載が始まりました。

21号(2005年1月) ～30号(2006年7月)

この時期、日本さい帯血バンクネットワークのホームページでの移植に使うさい帯血のオンライン申し込み機能、予約検索機能の追加と手続きが効率化され、年間600例というペースで移植が行われるようになりました。さらに、2005年6月にはさい帯血バンク次世代



「さい帯血バンクNOW」創刊号



設立3周年記念大会を報じる第7号



第18号で「きずなちゃん」が初登場



デザイン会議を発足させ、今後のさい帯血バンク事業の検討、提言が行われています。

さい帯血移植の対象になりにくかった高齢者や臓器障害を持つ症例にも、移植の可能性が広がることとなったさい帯血のミニ移植。提供基準の細胞数のさい帯血を確保することが難しかった体重の重い患者さんに、複数のさい帯血を同時移植する臨床試験の開始などが記事となっており、成人のさい帯血移植の可能性がより広まったことがうかがえます。

28号からは「さい帯血バンク道具箱」の連載が開始され、さい帯血バンクでどのような機材を使ってどういう作業が行われているかの紹介が始まりました。

31号(2006年9月) ~40号(2008年3月)

この2年半の間を遡ると、まず初めに31号で「紀子さまのご出産おめでとう、そしてありがとう」という記事があります。紀子妃殿下のご出産に際して、秋篠宮ご夫妻は「国民の役に立つことであれば」と快くさい帯血をご提供いただき、さい帯血バンクの活動も注目を集めることになりました。33号ではさい帯血の細胞保存基準を4年ぶりに引き上げる、という記事が掲載されています。採取・調製保存施設の負担は増していくことになりましたが、成人への移植が増えるなか高まるニーズに答えるための重要な決断は、現在も着々と移植数を積み上げる結果となっています。その成果として、38号

には4000例突破と、82歳の患者さんがさい帯血移植により社会復帰した記事が掲載されています。

41号(2008年5月) ~49号(2009年9月)

2008年春に鎌田会長を引き継いで中林第3代会長の新役員体制がスタートしたことを報じた41号から田結庄さんの「私とさい帯血移植“医師として患者として”」の連載が始まりました。43号では保存さい帯血数が3万個を突破し、細胞数の多いものへシフトしていること、新たに「将来構想検討会」が設置されました。45号ではさい帯血移植が5000例を突破し、ほぼ同時に1万例となった骨髄バンクと合同記者会見したのを受けて「ありがとうキャンペーン」での銀座パレードの様子を伝えています。また、47号からは道具

箱に代わり、新たに移植病院訪問記の連載がスタートしました。そして、前号の49号はネットワーク設立10周年記念事業の内容を詳しく報じています。

さい帯血バンク NOW 第33号

特集 細胞保存最低基準を引き上げへ 4月から8×10⁸個以上に

さい帯血バンクの細胞保存最低基準は、2006年9月1日現在、1000万個(1×10⁷個)です。これを4月から引き上げ、8000万個(8×10⁸個)に引き上げることが決まりました。これは、さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、より多くの患者さんにさい帯血移植が可能になることを目指しています。

成人への増加受け さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、成人へのさい帯血移植が可能になることが期待されています。さい帯血バンクは、成人へのさい帯血移植の臨床試験を行っています。

国連でも決定 さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることが、国連でも決定されました。これは、さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、より多くの患者さんにさい帯血移植が可能になることを目指しています。

造血細胞移植の最新動向 造血細胞移植の最新動向について、さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、より多くの患者さんにさい帯血移植が可能になることを目指しています。

造血細胞移植の最新動向 造血細胞移植の最新動向について、さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、より多くの患者さんにさい帯血移植が可能になることを目指しています。

第33号では保存細胞数引き上げで特集

さい帯血バンク 道具箱 ① ドライシッパーの巻

さい帯血バンクの道具箱は、さい帯血の採取・調製・保存に欠かせない機材です。今回は、ドライシッパーの巻です。ドライシッパーは、さい帯血を採取・調製・保存するために必要な機材です。今回は、ドライシッパーの巻です。

液体窒素での運搬 さい帯血は、液体窒素で凍結保存されます。液体窒素は、さい帯血を凍結保存するために必要な機材です。今回は、液体窒素での運搬の巻です。

魔法瓶と同じ構造 さい帯血の採取・調製・保存に欠かせない機材は、魔法瓶と同じ構造です。魔法瓶は、液体窒素を保存するために必要な機材です。今回は、魔法瓶と同じ構造の巻です。

植物や動物名を付けて管理 さい帯血の採取・調製・保存に欠かせない機材は、植物や動物名を付けて管理することです。植物や動物名を付けて管理することによって、さい帯血の採取・調製・保存が容易になります。今回は、植物や動物名を付けて管理の巻です。

「道具箱」の連載開始(第28号)

さい帯血バンク NOW 第45号

さい帯血移植が5000例達成 先年の骨髄バンクも1万例に

さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、より多くの患者さんにさい帯血移植が可能になることを目指しています。また、先年の骨髄バンクも1万例に達しました。

造血細胞移植の最新動向 造血細胞移植の最新動向について、さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、より多くの患者さんにさい帯血移植が可能になることを目指しています。

造血細胞移植の最新動向 造血細胞移植の最新動向について、さい帯血バンクの細胞保存最低基準を引き上げることによって、より多くの患者さんにさい帯血移植が可能になることを目指しています。

さい帯血移植5000例突破を報じる第45号



すこやかに、幸せに。明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。

NIPRO

ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番9号



創刊50号記念に際して 私とさい帯血バンクNOW

創刊の頃

鈴木一寿

「ネットワークの広報誌を作成して、定期的に情報発信をしましょう！」と決まったのは、ネットワーク発足後、2年が経過した頃であったと記憶しています。毎月の広報部会の中で検討が進められ「名称は『さい帯血バンクNOW』、奇数月に隔月刊で発行」ということになりました。しかしながら、限られた予算の中では、「原稿や写真を業者に渡してあとはお任せ……」ということは到底無理な話で、レイアウトなども含めた最終稿まで広報部会

仕上げて、それを印刷業者に渡さなければなりませんでした。

幸いにも、広報部会のメンバーは「その道のセミプロ集団」で、原稿の執筆、写真撮影、原稿の作成から校正までであったという間に仕上げていきました。広報部会の皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。

私が携わった中で最も印象に残っているのは、ある時「広報部会のメンバーだけでなく、事務局員も取材をして記事を書いてみませんか」との編集長命

令で一度だけ記事を書いたことがありました。取材を済ませて、記事を書きましたが、作文が苦手な私には満足いただけるモノが書ける訳もなく「これは『報告書』だね、記事になっていない。読む側は全然面白くない、書き直し」といきなりのダメ出しでした。その後は、私の文才に見切りをつけてただけたようで一切同様なお話しはありませんでしたが、今となっては良い思い出です。

(初代ネットワーク事務局員)

貴重な情報源

森鉄男

私もさい帯血バンクの仕事に従事して10年が経ちました。さい帯血調製・保存や、採取医療機関との連絡調整、移植医療機関への提供に追われ、さい帯血移植を取り巻く状況を理解することが少なかった私にとって、さい帯血バンクNOW創刊号が発行されると、それ以降「さい帯血バンクNOW」は貴重な情報源となりました。

なかなか知り得ない患者さんの気持ち、移植医療機関のスタッフのご苦労、採取医療機関のスタッフの熱意や他のバンクスタッフの取り組みなど目の前

でお話をうかがっているような感覚で読ませていただいています。このような記事は、私たちバンク担当者の日常業務におけるモチベーションを上げ、同じ様に「さい帯血バンクNOW」を読まれる患者さんの希望を増やし、妊婦さんのさい帯血提供への意欲を向上させることに役立っていると思います。

2003年1月15日発行第9号ではリレー紹介⑨では福岡バンクが紹介され、2006年11月15日発行第32号では福岡で開催された全国大会の記事で、私が発表した福岡バンクの紹介が写真付で掲

載され、親戚一同に配って額に入れて飾りたい衝動に駆られました。しかし、さい帯血移植は、骨髄移植と比較して世の中の認知度・関心はまだまだ低いと感じる事があります。さい帯血バンクに携わる私達はもとより「さい帯血バンクNOW」をより多くの方に読んでいただける努力が必要ではないでしょうか。さらに内容の充実したものが発行されるように希望いたします。

(福岡さい帯血バンク)

さい帯血移植の有効性のために

西平浩一

「造血幹細胞の基礎的研究からさい帯血バンク設立・さい帯血移植・白血病治療」が私の医師としての大部分であります。今から約40年前にさかのぼる

造血幹細胞培養の国内初めての成功、幹細胞の増殖の旺盛なことに感動し研究に夢中になったものでした。その頃の様子創刊号に中畑龍俊教授の「さ

い帯血発見秘話」として掲載され感激したものです。研究を継続するうちにさい帯血には骨髄よりも増殖旺盛な幹細胞が存在することが発見され、さい



帯血を造血幹細胞移植に利用できることがわかり、国内はじめての「神奈川県帯血バンク」設立となりました。さい帯血バンクNOW第4号では、厚生科学研究「ヒトゲノム・再生医療研究事業」公開シンポジウムで私が報告した「日本さい帯血バンクネットワークを利用したさい帯血移植症例の臨床成績」で540例の移植症例の生存率等の概要が掲載されました。当時からさい

帯血保存数、移植症例数、移植成績とも世界のトップクラスであることが明らかにされました。第8号では移植例数は751例に達し、利用数が急速に増加していること、これらの移植成績を広く世界に発信するため、私は多数の関係者と協力のもとに英文誌 (British Journal of Haematology, Leukemia and Lymphoma, 米国、英国) に掲載するとの記事があります。この論文で

移植多数の症例解析から、さい帯血移植の有用性がさらに明らかにされました。さい帯血バンクNOWはその後も多くの方々の努力の結果、さい帯血移植に関するニュースを発信し、移植を必要とする患者さんの医療に多大な貢献をすることを期待しています。

(神奈川県帯血バンク)

時々の問題点を紹介

高梨美乃子

創刊時から2006年5月まで広報部会のメンバーでした。当時の部会長、野村さんの指導力に感嘆し、ボランティアの力を学習しました。その道のプロって仕事が速いです。私などは、企画が円滑に遂行されるのを、半ば感嘆しつつ眺めていました。そして、2001年から今まで続けて下さっている継続性にも感動します。月に1回、企画と原稿の確認、誌面構成のための会議を開き、隔月の発行を崩す事なくこれだけ続けているとは驚くばかりです。2006年度には、広報部会の運営に信頼をおき、私は抜けさせて頂きましたが、

日本さい帯血バンクネットワークの中で最も良く機能している実働部隊だと思えます。

ネットワーク関連で苦慮する要因には、時間と内容の両面で、仕事とボランティアの兼ね合い、もあるのですが、「さい帯血バンクNOW」の広報誌としての役割は分かりやすく、楽しく作業させて頂きました。原稿の分担もありましたが、(書くのに慣れてるとはいえ)野村さんや他の方々の文字数を見れば、文句も言えず(ちょっとは言ったかしら?)、努力するしかありませんでした。日本語の訓練にもなった気が

がします。

改めて「さい帯血バンクNOW」を見直してみると、その時々に関心事が分かります。さい帯血移植の実績は着実にのび、移植医療に確たる地位を築きました。一方で財源問題は初期から継続です。次世代/将来像を描くには難しそうな課題が残ります。日本さい帯血バンクネットワークは11年目ですが、「さい帯血バンクNOW」によって時々の問題点を広く紹介し訴えることはますます重要だと思うのです。

(日赤東京さい帯血バンク)

毎号発行が楽しみ

嶋村恵美

創刊当時、宮城バンクは日本さい帯血バンクネットワーク加入に向けて設備を整え、必死になってデータを揃えているところでした。その後、2002年3月に無事入会の承認をいただき、同年5月発行の第5号に「宮城さい帯血バンク 10番目の仲間です」と紹介記事が掲載されました。ここからが私と「さい帯血バンクNOW」とのおつきあいの始まりです。

当時「日本さい帯血バンクネットワーク」がどのような組織なのか良く分かっていなかった私には、さい帯血バンクの現状、課題、移植の成績や他バンクの紹介などが掲載されているこの広報誌が教科書のようになっていました。毎号届くのが本当に楽しみで、

宮城では真っ先に読める幸福を感じたりもしていました。

これまでを振り返ると、「採取病院訪問記」や「さい帯血バンク道具箱」など面白かった記事はたくさんありますが、いつも一番心に残る記事は、患者さんの手記です。宮城バンクは東北大学病院と密接に連携しているため、医師にお願いして移植の様子を見学させて頂いたこともありましたが、患者さんがどのようなお気持ちで移植を受けられ、その後どのように病と闘っておられるのかは分かりません。読んでいて時につらくなる事もありますが、その度にさい帯血バンクが存在している意義を深く再認識させられます。

最後に、「さい帯血バンクNOW」が

最近活躍している場面の一つ。7月からドナーへの「健康調査票」をお願いする手紙に同封することにしました。すると、打てば響くような速さで回答が来るようになったり、催促する件数が減ったりと、ちょっとビックリな反応がありました。採取病院には以前から配っていましたが、やはりご提供頂いた方々にとって大変興味深いものなのでしょうね。もっと早くからやっておけば良かったと後悔しつつ、「さい帯血バンクNOW」および広報部会の皆様には感謝感謝です。これからも奇数月の15日を首を長くして待っています。

(宮城さい帯血バンク)



移植病院 訪問

②九州大学病院

最新無菌病棟完成で 移植成績アップ

九州大学病院では、12年をかけた病棟群の新築工事が今年9月に外来棟の竣工で完了し、広いキャンパスにその偉容を見せています。九大病院では第一内科と第三内科が合同で血液・腫瘍内科として、年間60～70例の造血細胞移植を行っています。そのほかに小児科が10例程度の移植を行っていて、それらのうち20例程度がさい帯血移植です。移植を行う無菌病棟は南棟11階にあります。

全室個室の32床

九大では1980年代後半から骨髄移植を始めた移植でも歴史のある施設です。当時は隣接する旧病棟を改装しての移植でしたが「この新病棟と比較すれば汚いところでやってたんです」と移植医の宮本敏浩さんは語ります。新病棟は全室個室の32床で、ここで2006年4月から移植が始まりました。病棟全体がNASA規格でクラス1万（1立方フィート中に0.5ミクロン以上の粒子が1万個以下）という清浄な空気となるようにすべての空調がHEPAフィルターで制御されています。

患者さんは病棟内を自由に

「旧病棟の無菌室はクラス100でしたが、移植で患者さんが入室する前にホルマリンを燻蒸し滅菌して使用していました。準備も大変で、以前と比べたら無菌管理も随分楽になりました」と看護師の永江ゆき子さんはいますが、1990年代後半から完全無菌管理は必要ないことがわかってきました。無菌室で闘病する患者さんの厳しい生活もこれで緩和できるようになったのです。

新無菌病棟では病棟全体を無菌化しているため、患者さんはいつでも病室を出て病棟内を移動することができ、ラウンジもあって患者さん同士がコミュニケーションしたり、行動範囲が広くなりました。永井さんは「患者さんにとってメンタル面では大きく改善されたと思います」といいます。

真菌感染症もゼロに

また、リハビリ療法士や口内炎ケアなどのスタッフもいつでも病棟に入ることができます。患者さんによっては毎日入浴している方もいるようです。病室の一部にはシャワー室も備わっていますが、グラム陰性桿菌の増殖があるため、病室のシャワーではなく、病棟のシャワーを使っているそうです。こうした無菌室での闘病生活はかつてと比べて大きく変わりましたが、豊嶋崇徳医師によると「以前ではどんなに苦労しても一定確率で、侵襲性のアスペルギウス感染症がありましたが、新病棟では一度も発生していない」とのことです。移植成績向上にも大きく寄与しているようです。さらに、この新病棟では移植患者さんも化学療法の患者



憩いの場・ラウンジにはエクササイズマシンも

さんも一緒にケアが行われているところも画期的なところであるといえるでしょう。

■善意のお気持ちに感謝します■

兵庫県	井手 俊彦様	300,000円
神奈川県	堀江 亮様	100,000円
埼玉県	前野 鏡彦様	30,000円
埼玉県	大寺 信行様	6,000円
岩手県	遠藤 律枝様	3,000円
設立10周年記念事業個人・団体寄付金		
東京都	田中 卓也様	50,000円
千葉県	辻 美帆様	10,000円
カリディアンビーシーティー（株）		100,000円

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

00180-9-57390

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

支店番号：019

預金種目：当座

口座番号：0057390

口座名義：日本さい帯血バンクネット

ワーク



今年9月に新装完成した九大病院